

俳諧

三

部

集

天

322
1



027
332
1

愛知女專
第 1120 號
書 圖

蕉下菴發句抄

不二白 唯春のゆくえり

春部

金翠曰是庚辰歲旦ノ句也春タツトイフ
ハカリニヤ三芳野ノ山モ霞テケサハミユラシ
拾遺集第一志岑ノ哥也此哥ノ上ノ七文字
ヲカテ俳句トナス是換骨ノ添アリ

しひすのききまき梅

牧十曰清少納言枕草昏ニウタヒスノコトヲ
イハレ段ニ夜鳴ヌモイキタナキコ、チス今ハ
イカハセン此言葉ニモトツキテイヒイタ
セリト見エタリ

六十三

七十一

嗟は能くゆても梅は匂ひる

魚貫曰此句俗語ライヒテ俗意ニアラス
梅ノ香ハ今古無隔貴賤無差トイフコ
トライフナリ

や治山といふも昔といふも
世のうねりや人なりと

うねりすもあまよめる歌まうら

蘭明曰古今集ノ序ニ宇治山ノ喜撰ヨメル
奇オホクキコヘ子ハトアリ故ニ世ニ傳ル歌一首
我イホハ都ノタワミシカソスム世ヲウチ山ト
人ハイフナリ又鶯ニモ云傳ル哥一首初ハルノア
シタユトニハ来レトモ逢ニテソカヘルモトノ古
樂ニカレコレヲカヨハシテイヘルナリ

何き福と巻の苦むらう鳴蛙

心牛曰此句官袴ノ身ヲ愁ヒ語ル人ノ帰リテ
後ノ吟也古語ニ受人之養而不死其難
不義也死其難是死無道之人豈義哉

大空今風と余のいのちのたま

玄美曰莊子ニ冷然善也トイヘル語ニモト
ツク猶有所待者也

周からう梅の匂はあやめ

心水曰梅ノ花ニホフ春ハタラフ山閣越エ
レトニルクソアリケル又香ヤハカクルトイヒ
香ヲタワ子テソトヨメリ此句ハ香トモ匂ヒトモ
イハテ梅ノ晦日ト云ナリ

初年也 俗に神子もあふ 尊

敬和曰初午ハ哥ノ題ニモ見エタリキサラキ
ヤ今日初午ノシルシトテ稲荷ノ山ニモトツモ
ナレ依テ一句ニ俳諧ヲイフナリ

涅槃會也 亦性生もいふなり

機夕曰霍林ノ昔ヲ爰ニウツレテ子ハシ會ト
イフ此日吾人モ斃ク死ヲ思フ心アリ霍林ハ
教迦如來入滅シ給ヒシ時紗羅林ノ花ノ色
白クナレリヨツテ霍林ト云フ

祢之ん會也 出と忘々 枕檮

守中曰是世俗ノ心ノウツリヤスキヨイフナ
リ前ノ句ヲ以此句意ハ解ナリ

をのころ心居てはくふしを小

其匏曰曼ヲハクラメノ自在ヲイフナリ禮礼ニ曰
仲春月玄鳥至又コノ樂ニツキテアハレナル本
文アリ白爰ニセンナキ爰ナカラフ書載セ侍ル南史
ニ云霸城王整之姉嫁為衛敬瑜妻歲十六而
敬瑜亡父母舅姑咸欲嫁之誓而不許截耳置
盤中為誓乃止所住戶有樂巢常巢去後
忽孤飛女感其偏栖乃以縛繫脚為誌後歲
此窆乎復更來猶帶前縛女為詩曰昔年無
偶去今春猶獨歸故人恩既重不忍復
雙飛

降ハハハ志は怒雲の別也か

黎明曰世諺ニ春三月ノ中降霜ヲ八十八夜
ノ別霜ト云懼ナル本文ナレ然トモ俳三二也

志不^く^く海^中芙蓉よ志望の花

風塵曰是ハ予カ古硯ノフタニ句ヲコヒニ筆ヲ
取テ書レレ句ナリシホナラヌ海、途江ノ海ナリ
関屋ノ歌ニモ見エタリ

麻ホハホ何^れ何^れを^か誰^の声

一磨曰鳥獸ツミコヒノ避速シイフナリ古歌ニ
足曳ノ山ノ夕エマニ妻コフト鹿ニモ一サル声
キコユナリ是猿フカクシ題ニテヨメリモノニツ
自然ト相似タルナリ

七の句く花まほり山の寺

祇呂曰山寺ノ春ノ夕暮キテ見レハ入相ノ鐘ニ
花ノ散リケル此哥ヲ句中ニ念テ花ニコ、ロヲツ

ケヨト言テ下意ニハ花ヲフヨク惜ム心ツイヘル
ナリアル人曰此句山ノ鐘トイフ一キヲテニアト
置タル所詔路ノ味ヒアリトイヘリ

散花中心^のせてい^のこま

柳雪曰是杜子美カ句ニ寄レリ一片花飛
減却春風飄萬點正愁人

夏部

何由ハ家カ訪ヒ此コ本ノ求ム也ナ

曉雨曰此抄ニ載セン詩歌アケテカソハ難シ
唯動ノ字ヲ眼目トス又地藏十王經ニ曰ク
閻魔王宮ニノ鳥アリ一ツハ無常鳥ト云フ
コレ別道都ト幾ト壽ト也ナ其鳴声ワカレノカレ
ヨイクハククイノチツト鳴也則上ノ五字ヲ和
ケタル也此事イカト思フニ古今集御抄ニ
ミクニノミチカ歌ノ注ニ書載給ヘリ又コノ
都ノ文字ヲトノ假名ニ用ヒタル事不審也
万葉ニハ此都ノ字ヲツトイフ假名ニ用タリ
道ヲ好ム人尚可尋

初ハ難シこの危カ丁チ七十九年

玄美曰莊子ニ良庖歳更刀割也族庖月更刀折也今臣之刀十九年矣所解數千牛矣而刀及若新發硎コノ語ニヨレリ

何さふ欲心は梅の井

心水曰古語ニ斗斛ナワテ天下アラソフ或人此句ヲ難テ曰梅ノ弁ニカキラス粟ノ升芋ノ升トフレナリト云リ是一句ノ風姿ヲ知ラス句ノ体用ヲ辨ヌ人ノ言事也先此句粟芋ノ升ニテハ風姿ナシ其上是ハ梅ヲ体ニイヘルコトヲ欲フ諫ル句也故ニ梅ハ用ナレハ動キ欲ハ体ナレハ動ヌ也コノ類和歌集ノ雜ノ部ノ歌ノ中ニアル也ヨク々當合葉

雌百合よ兔と花の心

黎明曰此句雌トイヒ兔トイヒ皆花ノ上ニイヒミタレト下意ハ人情ヲイヘルナリ

五月あや洩て六月の怒り

魚貫曰月見ヌ月ト詠レニツキテタマサカニ出ル月モ滯ルトイフナリ

一口ハ嫁は忘る田植

蘭明曰昔今ヨメ姑メクノ中ノ勃礌セヌハミレナリ是此句中ニ憎ノ字ヲ包タリ

つと精年自の言は後夜の障

敬和曰鶴三月ヲ結ヘル句云フリタレト是ハ做摸變様シテ新ニ語意ヲナス詩ヲ有聲一画トイフモ此句ヲ見テ首肯スル也

燈火の元よちねれる夏のむし

祇南曰夏虫ノ身ヲ徒ニナスコトモツ思ニヨレハ
ナリケリ又燈火ハ西京雜記ニ樊將軍噲問
陸賈曰自古人君皆云受命於天云有瑞
應豈有是乎賈應之曰夫目矚得酒食燈
火華得錢財乾鵲噪而行人至蜘蛛集而百
事喜小既有徵大亦宜然故目矚則呪之火
華則并之乾鵲噪則饑之蜘蛛集則放之

闇のおつふあまの螢ふ

既旦曰源氏ニ夜ニツ、ミレテトイヘル言葉ヲ
一轉シテ包アミレルトイヘルナリ

魚ニツの蓮八九本、不立尺

金翠曰蓮八九本ハ白氏文集イホ五尺ハ西上
人ノ歌ニアリ

短おゆを多々蓮の初おけ

守中曰此句ハ人ノ子ノハマウ下世シユルニ送レル
句ナリ短夜ニ世ノ短キヲ露顯ス

すゝあまの歌のまりの程

其匏曰此美人唐土ノ事ツイヘルニモアラヌ
唯美シキ顔ニ風ノスキタルツイフナリ

秋部

そらそらの後にもあはれ秋の風

心牛曰此句前ニ避暑ノ二字ヲ置レタリ初秋ノ風ノコトヨキヲイフ也就中斷腸曼秋天トイヘル本文ヲ後ニス

初秋や誰秋代のあはれ川

枕義曰形代ナテモノハ御秋ニ流セルモノ也故ニカケ合ニ云也芥川ハ塵アククノ縁語ヲ云也

相尔と初風のあはれ合をん

魚貫曰淮南子ニ梧桐一葉落天下知秋ノ本文ニヨレリ

衣はるき着るもくつ秋の雲

牧十曰詩ニ雲想衣裳花想容哥ニキヌキヌ
山ノヲヒシスルカナ又秋風起兮白雲飛是
等ヲ思ヒ寄テイフナリ論衡云雲ハ雨ノ徵
也夏ハ露トナリ冬ハ霜トナルアタタカナハ
雨トナリ寒ハ雪トナル則雨露雪霜凍
凝者皆地ヨリヲコリテ天ヨリクタラス
ト云々故ニ連俳ニモ雲ハ儻モノ也

公樂の落思も憎く女郎花

守中曰古今集第四僧正遍照サカ野ニテ馬
ヨリ落テ名ニメテ、シレルハカリソクミナヘシ
我ヲ子ニキト人ニカタルナ此奇ニテ此句意ハ
コ、ロヘテル、ナリ

光相撲伊東の歌をよみかふる

金翠曰此句画賛也川津股野トイハテ赤澤
山ノ角カライフ也相撲ハ寛平七年七月ヨ
リ始ル其後諸國ノ供御ノ人ヲ召集メテ
相撲ノ節アリ此スニヒラアトス使ヲコト
リツカヒトイフ万葉集ニ相撲使トカキテ
コトリツカヒトヨム也増山井云スニヒノ秋ニ
ナル事七月オホマケコトナレハナルシ今世ニツ
モ侍レト打マカセテハスニヒトイヒテモアキ
ニ用ルナリ

暑たけをかくるを四十雀

敬和曰言意ヲノツカラ老ヲ歎スル心ヲ
句中ニ含メリ

不草と起しもまぬ燈分ル

本留曰此句搖落深知宋玉悲トイヘル語ニ
ヨラレタルカト問レニサニハアラス唯野分ノ烈
シキライフノミト答ラレレ下意ハ不知

いそめそくさ月とまじりし海の舟

黎明曰大カタハ月ヲモメテレコレソ此ツモルハ人
ノ老トナルモノ此句コノ哥ニヨレリニノ句ヲ俗語
ニ言クタレテ三ノ句ニ俗意ヲノカルノ句法有
容カ可見

名月や今宵ハ西もくはとちろ

蘭明曰是月ヲ深クメウル意ヲ云也故ニ西ト方極
樂淨土モ月ノ入方ナレハ此夜ハウキトイヘルナリ

きよひさの月のあつきの教とめ

其袍曰古歌三月ノ桂ノ花ヤ咲ラント云光ヲ花
ト散スハカリヲト詠ルニモトツク

一つは秋の買を菊乃云

祇南曰菊花ニ齡トイヘルコト詩歌連俳ニ
多シ唯一ツカ子ノ齡ト云コトヲイヘルナリ

世渡るゑル打里かゝる石のふ

柳雪曰或人此句ヲ難テ曰キヌタウツトハ重
言也衣ウツレコロウツトコソイト云リ是深ク
モタウ子ヌ人ノ云也新撰六帖ノ歌三月ニ鳴
クヤモメ鶉ノ言ニ云テ秋砧ソ霜ニウツナル
又連歌ノ附合ニモ見エタリ

海の中ふ二扱かゝるは後の月

心水曰句意カクレタル所ナシ此句十三夜ト云
ヘキラ後ト置タルハ二夜後トツクヲ思フ言
ナルヘシアル人此五文字ノアノト云コトハイカト
云リ源氏物語ニアノ女御殿トアリ

送別

別きては柑子忘れたる伊勢使

一磨曰是ナカ亀山へ趣ク時ヲクラレシ
句也哥ニ此春ハイセニ知人ヲトワレテタヨリ
嬉シキ花柑子カナ又俳句ニ蓬萊ニキカハ
ヤイセノ初便此ニツニヨリテイヘルナリ

秋暮

淋しぬ誰か負し秋の暮

祇呂曰此句閑居寂靜不負ノコトハニアリ
負シノシハ未来ノシ也尤可濁

今日の吾なきのふの我を秋暮

三登曰是可解不可解ノ句也唯見ン人ノ
心意ニ順ヒテ句意ヲ生スヘシ故ニ解フ不
加

きふのこは秋を思ふは淋し

玄美曰是九月盡ノ句也ケフノミト春ヲ思ハタ
トキタニモタツコトヤスキ花ノカケカハ此哥ヲ
スコシカヘテイヘルナリ

冬部

松風ハ似て似て松風ハ似て

心水曰此句ハ初時雨ニ日頃ノ松風ノ時雨
ヲ松風ソト知トイフコ、ロライヘルナリカクイ
ハ松風ノ時雨ハ似セモノナリサレト冬ノ季
ヲハ持也故ニ降モノニモ二句嫌フ也御傘ニ
云松風ノ時雨似セモノナルニ冬ニナレトイカ、
ト存スレトモ新式ニ泪ノレクレヲ冬トサタ
メタレハ此フシナリ泪ハ常ニレクル、シイハ人
ノ不審スヘキ義ナカラ際キコ、ロアルヘレ泪
ノアメヲハ降モノニキラハス泪ノレクレヲハ冬
ニナレテ降モノニモ嫌フハ古人ノコ、ロハカリカタ
レ此道理ナカレケレハ爰ニレサストイ
ロノコサレタリ

おとろくや落葉風人のきくおえ

守中曰此句古今集ノ序ニ本ノ葉ノオツル
ヲキハトアルヲトカメテ一ノ句ヘカヘレテイヘル
ナリ句意ヲ心得シニハ落葉ヲ人ノキクモノカ
ト云テツノ間ニコトニトイフコト葉ヲハレテ
衰ヘヤト吟スレハヨクキコユルナリ

いかゞや春身運せんと下ふ

敬和曰一年十二月ノ中老陽ヨリ少陰ニ移リ
老陰ニ迫ル其間六ヶ月老陰ヨリ少陽ニ移リ
老陽ニセマルモ又六ヶ月也是コノ句ニコレヲ合
タリ兼好モ此事ヲイヘルコトアリ

奈ふふむむと餅も云武の青舟よ

牧十曰是大廻シノ句体也又コノ青舟吉ナ
ラト云事古來ヨリ説キアリテ難決シ今
此青舟吉ハ本説ヲ考ヘスカリ字ノ字面ニ
ツキテイヘルナリ

あつむを名護屋も床大根付

黎明曰アツフスニナコヤカシタニフセシトモイ
モトシ寐子ハ肌シ寒シモ万葉集第四藤原木夫
ノ歌也此ナコヤカシタハナコヤカトイフ事也夫レヲ
尾張ノ名護屋ニイヒカケテ云ルナリ尾張ニ大根
ノ縁語アルナリ又云鮑兼童蒙抄ニ此ナコヤカ
シタヲカヒヤカシタニ鳴蛙トヨメル歌ノ抄ニ出
セリ俊成頭昭ノ説ニタカヘリ異説ナカラ捨
難シナラタツ又ヘシ

初雪小手を借るゝ氷流

玄美曰歌ニカシラノユキトナルソワヒシキト
アリ此外本文難勝計

隣家の人の子のやくもるよ
とまり負一くてまじとまり
もつし任をばまして夜かきまん
り思ひゆくましく哀か思ひゆきん
たれる布かしくゆるしん

疱瘡のかき山寒一古ふる也

金翠平曰句意ハ言葉書ニ見タリ都出テケフ
三ヶ原イツミカハ川風サムレコロモカセ山鹿背
山ハ山城ノ名所ナリ夫ヲ此句ニトリムスヒテ
一句ノ風姿トナス語路ノツ、キラフモフ
へし

先佐のこふし握るをさし

柳雪曰勤仕サマノナル中ニカチ人ノ寒ヲ
見ツケラレタリ史記ニ意氣揚マトイヘ
ルオモカケアリ

世の中ははらうけそは寂滅カ業
もはらうかうかひはらうしん
の身世きよりのまはらうかひはらうしん
と思ふてあはれはらうかひはらうしん

死まんハ生て指らるゑ置巨魁

祇呂曰前ノ言葉ニ意旨アラハレタレハ句解
スルニ及ハスサリナカラ捨果テ身ハナキモ
ノト思ヘトモ雪ノ降ル日ハサムクコソアレコ
ノ哥ヲ下意ニフクナリ

志きふ子の瓜苗をさし置まり年の市

其匏曰此句俗情ノミト心得ルニ韓非子曰
曾子之妻之市其子隨之而泣其母曰汝
還顧及為汝殺屍通市来曾子曰嬰子
非与戯也嬰子非有知也待父母而學者
也聽父母之教今欺之是教子欺也父
欺子而不信其母非所以成教也遂烹
殺之

人ハ其處の命ハ甚クシテ其價乃
せ切りの破事と一の限ハハホホ
二ツハ性ノ多ク多ク一是皆かの
其のまゝ人怒まのりハ也

行々々や露のかけ取日能龍

一唐曰日ノ鼠ハ逆義記ニ云譬ハ人ノ王ニ非
ヲ得タリ其人遁レ走ル王醉象ヲレテ追シ
ムオソレ急ニシテミツカフ枯井ニ投ス井ノ
ナカハニクナタル草アリ手ヲモテ是ヲヒカヘ
タリ下ニ惡竜アリテ毒ヲ吐テ是ニ向フ五
毒蛇アリテ又害ラクハヘントス又黑白ノ鼠
アリテ其ハ草ノ根ヲ嚙ム大象上ニノソミテ
又ナメントス其人若キキハマリテ大キニオソル
井ノ上ニ二樹アリ木ノ上ニ蜜滯アリテロノ
中ニ落ル味ニフキテシハラクオソレヲ忘レ
又是枯井ハ生死也醉象ハ無常也トクニ竜
ハ惡道也五蛇ハ五ウレナリ腐草ハ命ノ根
ナリニ鼠ハ黑白月日也蜜滯ハ五欲樂ナ
リ蜜滯ヲチテ怖レヲ忘ルトイフハ衆生ノ
五欲樂ヲ得生死ノ無常催レセシムルコト
ヲワスレタルニタトフルナリ又果報經

ニコノタトヘアリ

才渡き何人にも用は
友もそをけりし哉

俳諧も家と一の尾よ定きぬ

魚貫曰毛詩云狼跋其胡再定其
尾

はし帖の蕉下巻の日記庚辰

喜より幸已秋まきの發句は

中か連中誰れんんくよ

ぬれ出しんいんの抄を

加へく板行する所を至

ある人問云存在の人の句を

抄に加へる例のりや答て

去るは是ハ昔ノ貞徳翁
獨吟自注といへる書ニ寄
て思ひ立ぬる仕業也んん人
是成りたる人

蕉下菴門人

其貌
魚貫

